

# 19世紀中頃におけるイギリス上流階級の社交空間

—— ジョッキークラブに見る競馬のスポーツ化を中心に ——

鍵谷 寛 佑

## はじめに

イギリス競馬は、19世紀中頃において、貴族、ジェントリたち上流階級が社交の場として独占し得た段階から、中産階級の台頭や労働者階級の娯楽の希求が要因となって、あらゆる人々の娯楽空間へと変貌を遂げた。競馬場は、様々な人々を包括する一大ページェントとなったが、このことは、ジェントルマンのアマチュアリズムによる競馬から、スポーツとしての競馬への転換をもたらした。もっとも、それぞれの階級の競馬に対する想いやスポーツ化への対応には、大きな差異があり、それは、競馬場におけるグランド・スタンドにおけるすみ分けや、スタンドと同じく、限られた人々しか入場を許されないリングの存在に顕著に現れている。これらは、時には対立し、時には複雑に絡み合うという性質を持っていた。本稿では、有閑階級を中心とした社交クラブとして誕生し、数々の競馬改革によってイギリスにおけるスポーツ統括団体の先駆けとなったジョッキークラブの19世紀中頃の状況を検証することで、イギリス競馬のスポーツ化の一端、貴族やジェントリたちの競馬への想いを紐解くことで、この時期のイギリス上流階級の社交空間を示したい。

ジョッキークラブは、18世紀中頃に貴族を中心とした上流階級の社交クラブとして誕生したが、イギリスにおけるスポーツ史の権威であるレイ・ヴァンプリュー (Wray Vamplew) のジョッキークラブ研究を、設立時期の1750年頃から20世紀転換期までのクラブの変遷を概観して、時代区分を付すならば、設立から19世紀初頭までが第一期でクラブの揺籃期といえる。この段階においては、自らが本拠地とするニューマーケットの競馬に対していくらかの改良を加え、クラブを発展させる下地を整えているという状況であった。続く19世紀初頭から1860年ぐらいまでが第二期で、クラブの発展期にあたる。とりわけ、1830年代から1846年のジョージ・ベンティンク卿 (Lord William George Frederick Cavendish-Scott-Bentinck, 1802-1848) の競馬界からの引退までが中心であり、本論文が主に扱うのもこの時期である。ジェントルマン層

にとって、この時期は競馬がアマチュアのスタイルからスポーツとして変容していく移行期にあたり、同時に揺籃期からの本質である有閑階級の社交空間として、クラブのメンバー同士だけでなく、中産階級や労働者階級といった他の階級に対しても自らの姿を見せ、彼らの高貴さやリスペクタビリティを誇示した時代でもあった。さらに、1860年代から20世紀の転換期がクラブの確立期で、19世紀末に、ジョッキー・クラブが競馬の絶対的権威となったと指摘される。この時代は、スポーツ化や商業化が促進される時期で、アドミラル・ラウス (Admiral Henry John Rous, 1795-1877) がクラブの財政担当になる1856年が起点となっているといえる<sup>1</sup>。

また、イギリス競馬の歴史、ジョッキー・クラブの歴史を研究対象としたロバート・ブラック (Robert Black) は、確立期の末である19世紀末の彼の名著において、ジョッキー・クラブのメンバーシップを中心として、クラブを1750年から1773年までの第一期、1773年から1835年までの第二期、1835年から出版年である1891年までの第三期という三期間に区分している<sup>2</sup>。1773年は、競馬年鑑 *Racing Calendar* の初版年であり、一方の1835年は、ジョッキー・クラブのメンバーリストが初めて *Racing Calendar* 上に掲載された年である。ブラックの区分に対しても、それぞれにクラブの揺籃期、発展期、確立期という定義ができる。これらを踏まえた上で、筆者は、設立から *Racing Calendar* の発行までをジョッキー・クラブの揺籃期とし、*Racing Calendar* の発行からクラブのメンバーリスト公開までを初期発展期、1830年代半ばから1840年代半ばのジョージ・ベンティンク卿時代を後期発展期、それ以降、特にアドミラル・ラウス時代からジョッキー・クラブの規則が競馬施行規則になった1877年までを中心とする19世紀末までを確立期とする<sup>3</sup>。

一般的に言われる1750年ごろのジョッキー・クラブの設立時において、当時の競馬は、上流階級の人々によるスポーツの代表格であり、彼らは、アマチュアとして自分たちが管理する競馬を楽しんだ<sup>4</sup>。18世紀半ばにおいて、競馬は支配者層にとって格好の余暇であり、競馬が近代という時代に合う形に改良される以前には、長時間にわたって行われた<sup>5</sup>。この時代は、同じ有閑階級に属する仲間が集まることで、それぞれが思い思いに競馬を楽しむというスタイルであった。

こうした中で、ジョッキー・クラブが成立することになったが、それは、18世紀における数多くの社交クラブの誕生と無縁ではなく、クラブにおける社交を通して、競馬の担い手である貴族、ジェントリの結束を強化するとともに、彼らに社会的エリートとしての自覚を維持させる役割を担っていた。とりわけ19世紀に入ると、支配階級が独占していた競馬には、中産階級や一般民衆が参加し始めたため、その様相が大きく変化し、競馬はある種の一般に開かれた性格を持つに至った。しかし、その一方で、

ジョッキークラブは設立当初からの特徴である排他性を維持し続け、時にはそれを強化し、彼ら独自の社交空間を破壊することなく、競馬の担い手があくまでも支配階級であることを再確認しえた。特に、筆者が定義する後期発展期は、支配階級が競馬を通して自らのリスペクタビリティを強調し得た最後の時代であったが、それだけに、自らを守るための社交空間の大掛かりな仕掛けが作られた時代でもある。

## 1. 研究史

次に、研究史を紐解きながら問題点を指摘したいが、イギリスのスポーツに関する研究には、数多くの蓄積がある。近年の代表的人物としては、アマチュアリズムを扱ったリチャード・ホルト (Richard Holt) や、経済史の観点からスポーツを捉えたニール・トランター (Neil Tranter)、イングランドにおける商業的スポーツ文化の起源を題材としたエイドリアン・ハーヴェイ (Adrian Harvey) などを挙げることができる<sup>6</sup>。また、長期的なスパンでのスポーツ・レジャーの分析を行った研究者には、ピーター・ボーセイ (Peter Borsay) がいる<sup>7</sup>。

我が国において、特に強調されねばならない先行研究は、川島昭夫氏の19世紀イギリスにおける「合理的娯楽」運動に関する研究であろう。川島氏はこの研究において、「合理的娯楽」を中流階級による社会統制策、改革策としての一面に限定した上で、1830年代から1840年代において、安全弁としての娯楽は、昔ながらの懐柔策やただの目隠しであるだけでは不十分であり、改良された「規律ある」娯楽が、社会全体の改善に積極的に貢献するようなかたちで改良され、提供されねばならず、そうした過程の中で、既存の娯楽に対する代替案として出された競馬が、公的な監督と統制の下で合理化され、唯一実現されたとしている<sup>8</sup>。また、ピアス・イーガンの「スポーツの世界」の分析やジェントルマン・アマチュアとスポーツを既存の研究とは異なる角度で分析した池田恵子氏の研究、刑法を通してイギリスにおけるスポーツの正当性を検証した松井良明氏の研究などが特筆できる。

しかし、イギリス競馬を主たる研究対象とし、なおかつジョッキークラブにも焦点を当てた著作となると、その数は実に限られていると言わざるを得ない。先に挙げたロバート・ブラックの1891年における主著 *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods* は、その中の一つである。ブラックのこの著作で特筆すべき点は、1835年を迎えるまで、メンバーリストという形で実在していなかったクラブのメンバーについて言及していることである。ブラックによれば、1753年から1773年までの間、つまり成立からほどない時期に、100名以上のメンバーが存在したとされている<sup>9</sup>。これは、主として、当時ジョッキークラブのメンバーしか参加できなかったジョッ

キー・クラブ・プレート競走の参加者から割り出した数字と推測されるが、彼のメンバー区分から、ジョッキー・クラブは、貴族とジェントリ、すなわち上流階級のみで構成されていたことがわかる。

ブラックの他に、ジョッキー・クラブを題材とした著作を発表している研究者には、ロジャー・モーティマー (Roger Mortimer) やジョン・ティレル (John Tyrrel) がいる<sup>10</sup>。上述の研究者たちには、ばらつきがあるものの、概ねジョッキー・クラブの設立を起点として、長いスパンでのクラブ像を提供しているといえる。

一方で、競馬を主たる題材とし、その中でジョッキー・クラブを扱った研究者には、先述のヴァンプリュエの他にマイク・ハギンズ (Mike Huggins) がいる。彼の著作である2000年出版の *Flat Racing and British Society, 1790-1914: A Social and Economic History* の中では、タイトルにあるように、主に19世紀のジョッキー・クラブ像が提示されているが、ここでは商業主義といった概念に力点が置かれつつ、多くの研究者が指摘する、ジョッキー・クラブの全国的な繁栄は19世紀後半までに達成されたという主張に対する修正が図られている<sup>11</sup>。ハギンズの研究には、商業化を中心として18世紀末から20世紀初頭の競馬を扱ったこの研究以外に、19世紀における競馬と中産階級を、文化や階級、リスペクタビリティから検証したものや、モラル・リフォームについて論じた研究がある。

## 2. 競馬年鑑 *Racing Calendar*

ここではまず、ジョッキー・クラブを考察する上で必要不可欠な史料である *Racing Calendar* について取り上げることにしたい。ジョッキー・クラブの設立から20余年を経た1773年、*Racing Calendar* は発行を開始されることになったが、これはクラブのその後の発展を大きく左右する出来事であったといえる。発行の背景には、当時のジョッキー・クラブ幹事の決定的なサポートがあり<sup>12</sup>、*Racing Calendar* は発行後すぐに、ジョッキー・クラブの事実上の代弁者となった<sup>13</sup>。

この *Racing Calendar* とは、イギリス各地における競馬の競走結果と開催予定の掲載を中心とした年一回発行の書物で、いわば競馬年鑑のような性格を持っていた。ジョッキー・クラブが発行を始めた頃には、すでに個人の手による記録集がいくらか存在していたが、ジョッキー・クラブのような団体が個人を組み込む形で *Racing Calendar* を掌握するという事例は初めてのことであった<sup>14</sup>。かくして、*Racing Calendar* を手中に収めることに成功したジョッキー・クラブは、この媒体を通して、彼らの規則、情報などを各地へ伝播させてゆくことになる。

本論文の中心であるペンティンク卿時代初期の1836年版 *Racing Calendar* を分析し



てみると、競走結果と開催予定を軸としながらも、その内容は多岐にわたり、巻頭の定期購読者リストを皮切りに、キングズ・プレート競走に関する規約やその勝ち馬の証明書、一般の競馬に関する規則、ジョッキー・クラブの規則と指示、判例集、本拠地ニューマーケットの競走において騎手が着用する服の色のリストである馬主リスト、闘鶏に関する記事、種牡馬リスト、そして、巻末にはジョッキー・クラブのメンバーリストが掲載されている<sup>15</sup>。

この中で、まず定期購読者リストに関して触れておくことにする。1836年版における購読者の掲載はウィリアム4世（HIS MAJESTY）を筆頭として、爵位を持つ貴族から順に始まっており、基本的にはサーの尊称を持つ人物までが先に名前を挙げられ、エスクワイア以下は、ベドフォードシャーからヨークシャーまで、アルファベット順で並べられたイングランド内39地域と、ウェールズ、スコットランド、アイルランドを中心としたイングランド外13地域の中で掲載されていた<sup>16</sup>。定期購読以外にも、この時期にはすでにロンドンの *Racing Calendar* 事務所、本拠地ニューマーケットのコーヒー・ルームはもちろんのこと、本屋が主であったが、ヨーク、マンチェスター、リバプール、バース、ウスター、ニューカッスル・アポン・タイン、エディンバラにも *Racing Calendar* を販売する代理人が存在し、当時の価格は12シリングであった。ジョッキー・クラブの後期発展期における *Racing Calendar* の購読は、非常に広範囲にわたっており、競馬に関心を持つ人々にとって、それが必要不可欠な情報源となっていた事実を示しているであろう。この点に関しては、次節で改めて取り上げる。

次に競馬の規則に関して検証してゆくことにするが、上述の通り、*Racing Calendar* には、一般の競馬に関する規則とジョッキー・クラブの規則が掲載されていた。1830年代のジョッキー・クラブは、すでに体系的な独自の競馬施行規則を設けており、これをニューマーケットでのみ有効としつつも、他の競馬場に対してこの規則を採用することを推進し、採用しない競馬場からの紛争解決依頼を一切受け付けないという姿勢を取っていた<sup>17</sup>。この態度を *Racing Calendar* 上で表明したことは、他の競馬場に対する一種の圧力であったといえる。

当時の規則を紐解いてゆくと、全60項目のうち第2項から第10項までがクラブの運営を司る幹事に関する規則で、第11項から第16項までがジョッキー・クラブのメンバーや、各ルームの入場に関する規則であった<sup>18</sup>。この点を考慮すると、この時期においても、設立からの特徴である社交クラブとしての性格を色濃く残していたと指摘できる。この他は、基本的に競馬の運営に直接かかわる項目であり、簡潔に書かれているだけの一般的な競馬施行規則とは異なり、極めて具体的かつスポーツとしての公平化を図る内容となっている。やがて19世紀末になると、ジョッキー・クラブの作成した

競馬施行規則が、一般的な競馬規則を完全に吸収し、新しい競馬規則となる<sup>19</sup>。これにより、ジョッキークラブの手による競馬のスポーツ化が、規則の面において達成されたといえる。

以上のように、競馬年鑑 *Racing Calendar* に関して、定期購読者リストとジョッキークラブの規則を取り上げてきたが、その変遷から、各時代におけるクラブの情勢を読み解くことが可能である。次章は、この史料を軸としながら、ベンティンク卿時代における、競馬を取り巻く人々の変化について見てゆくことにする。

### 3. 競馬を取り巻く人々の変化とスポーツ化

18世紀の競馬は、イギリス社会の上層に位置する人々によって運営されてきたが、19世紀半ばになると、競馬を取り巻く状況は大きく変化することになる。この時代において、競馬に明確な関心を抱いていた人々がどれほど存在していたかは、*Racing Calendar* の定期購読者リストを分析することで解明されよう。

先ほども取り上げたが、筆者が定義する後期発展期、すなわち1830年代半ばから1840年代半ばのジョージ・ベンティンク卿時代の初期における1836年版 *Racing Calendar* の定期購読者数は、1,365人であった<sup>20</sup>。一方の後期発展期末、1846年におけるそれは1,308名であり、ベンティンク卿時代初期と比べて、その数は減少しているが、大きな差はないといえる<sup>21</sup>。両版の *Racing Calendar* に共通している点は、18世紀と比べて、購読者数が確かな上昇傾向を見せていることで、競馬に関心を持つ人々は、時代を経てさらに増加したと指摘でき、注目すべき変化として位置付けられるだろう<sup>22</sup>。

しかし、ここでより着目しなければならない事項は、定期購読者の層についてである。*Racing Calendar* の定期購読者リストが、爵位を持つ貴族から順に始まり、一部の例外はあるものの、Sir. の尊称を持つ人物までが先に掲載されることはすでに述べたとおりである。彼らの多くには、His Royal Highness、His Grace、Right Honourable、The Honourable といった敬称が付され、当初から定期購読者の中でも特別な扱いを受けており、初版では、その割合は定期購読者522名のうち95名で約18.2パーセントを数えていた<sup>23</sup>。ところが、1836年版の *Racing Calendar* では、そうした敬称付きの別枠掲載定期購読者は、1,365名中167名で全体の約12.2パーセントとその割合を落としている<sup>24</sup>。減少の傾向はさらに加速し、ベンティンク卿時代末の1846年においては、1,308名中142名で全体の約10.9パーセントとなっている<sup>25</sup>。ジョッキークラブの後期発展期において、発展期初期の大部分にはなかった国王の *Racing Calendar* 購読は継続されているものの、上記の各年における定期購読者の層別分類と、敬称付きの別

枠掲載定期購読者に関する表1、2の事実が示すように、競馬の主たる担い手である貴族を中心とした上流階級に位置する人々の割合が減少し、競馬参加のすそ野が広がったことを意味している<sup>26</sup>。

次に、これらの表に関連して、地域別で掲載された定期購読者に目を移すことにするが、こちらの割合はどうであろうか。中でも、ここでは、エスクワイアを除いたMr. で表記された人々について取り上げる。1836年版において、Mr. として掲載された定期購読者は588名で、その大半を占めていたことがわかる<sup>27</sup>。そうした状況は1846年になっても変わらず、Mr. の定期購読者は561名を数えている<sup>28</sup>。その割合は、上流階級の社交クラブや軍の部隊、イギリス国外の定期購読者を除けば、それぞれ約45.3パーセントと約46.8パーセントであった。1773年の*Racing Calendar* で、Mr. として記載された人々は209名で、同じ算出方法から判明したその割合は、約40.7パーセントであった<sup>29</sup>。以上の点から、ここでは、Mr. としか称されない定期購読者の割合が増加したことを指摘できる。こうした人々が「単なるジェントルマン」であるのか中産階級であるのか、現時点ではそのすべてを断定することはできないが、19世紀半ばという時代背景を考慮した場合、十分な資金力を付けた中産階級の一部がより多く競馬に参加し始めたと言及することに問題はないであろう。

さて、これまで*Racing Calendar* における定期購読者の変化について検証してきたが、競馬年鑑の購読という行為自体は、競馬への参加という枠組みにおいて、直接的なものではなく、間接的で周辺に位置するものである。しかし、上流階級以外の人々の侵入は、そうした周辺部にとどまらず、より中心に近い部分にも及んでいた。それを示す事例が、馬主数の急増である。

1836年版で馬主登録を行っていた人の数は表3が示すように171名で<sup>30</sup>、18世紀末と比べると4倍近い数字となっている<sup>31</sup>。さらに、1846年版における馬主登録者数は331名となり、ペンティンク卿時代初期と比べて倍近くと、劇的な変化が起きていた<sup>32</sup>。この馬主の中で最も多くを占めていたのがMr. 層であり、その割合は、それぞれ約67.3パーセントと約69.2パーセントであった。馬主登録者リストは、その当初からエスクワイア以下がMr. で掲載されているため、定期購読者の区分とは異なるが、18世紀末の‘Colours worn by the Riders of the following Noblemen and Gentlemen’ という記載が、‘Colours worn by the Riders’ に変化している点を鑑みれば、貴族、ジェントリに属さない富裕な中産階級層が馬主としても競馬に関わるようになったと言える。

社会的上昇を望む中産階級にとって、高貴さの象徴とみなされていた馬を所有することは、格好の手段となったであろう。事実、1830年代半ばから1840年代半ばのジョッ

キー・クラブ後期発展期における馬主登録者数の増加は、それを如実に物語っている。競馬を含めたスポーツの世界は、現実の世界とはある種切り離された特殊な空間として作用する場合が多い。豊富な資金を得て馬主になった中産階級は、スポーツの世界で自らの存在をアピールすることで、疑似的な上流階級として脚光を浴びたいという意識があった。しかし、こうした競馬の中心に中産階級が次第に侵入してくるという状況を、競馬の主たる担い手である上流階級が黙って見過ごすわけではなく、実際に様々な策を講じていた。次節ではその点に関して触れることにしたい。

#### 4. 社交空間の制限

ジョッキー・クラブが、貴族、ジェントリを中心とした有閑階級に支えられた団体で、その設立当初から極めて閉鎖的な空間を形成していたことはすでに述べてきたとおりであるが、その規模の大きさや具体的なメンバー構成などはどのように変化していったのだろうか。

ジョッキー・クラブのメンバーが、*Racing Calendar* 上で初めてリストとして明らかになった1835年において、そのメンバーは総勢66名であり、様々な権限を持っていた3名の幹事は他のメンバーと区別されておらず、1838年になってからようやくメンバーリストの先頭に立つようになった<sup>33</sup>。旗揚げから長い年月を経ているにもかかわらず、メンバーが66名しか存在していなかった背景には、ヴァンプリューが述べるように、ジョッキー・クラブの極めて排他的な入会システムがあった<sup>34</sup>。クラブの新メンバー入会に関する独立した項目は、1828年におけるジョッキー・クラブ規則の大幅な改定によって設けられたが、入会の是非を問う無記名投票は年二回しか行われず、現行メンバーの推薦が必要で、なおかつ最低限必要な9名のメンバーの中で2名の反対投票があれば即否決されるという厳しい内容であった<sup>35</sup>。旗揚げから時代を経て、新メンバーの入会に関する規則が明文化されてもなお、晴れてメンバーになるための必要得票数のパーセンテージは極めて高く、ジョッキー・クラブは、揺籃期から続くクラブの特徴の一つである排他性を常に保ち続けていたといえる。

メンバーリストの初出に関して、先に挙げたハギンズは、「一部の上流階級の競馬に対する後援が一時的な衰退を見せていた時期で、ことによると、メンバーの状態に注意を促すため」としているが<sup>36</sup>、当時のジョッキー・クラブ幹事の一人であったスタンレイク・バトソン氏 (Stanlake Batson, Esq.) は、ジョッキー・クラブを「名高いクラブ (this celebrated Club)」とした上で、メンバーリストを掲載することに関して、「私たちは、いまや彼らの名前を供給することを可能にさせられ、我々の読者は、ターフがそれほど名高い団体の支配と庇護の下にある間、その利益と名声が安全に保

たれるということに賛同する」と発言している<sup>37</sup>。この事実は、ジョッキークラブの現体制を明らかにし、その勢力をより拡大させることを前提としたものであり、決して衰退を防止するための打開策として講じられたものではなかった。

メンバーリスト初出の翌年で、本論文が対象としているペンティンク卿時代初期の1836年におけるメンバー構成は、公爵 (Duke) 9名、侯爵 (Marquis) 5名、伯爵 (Earl) 12名、卿 (Lord) 9名、準男爵 (Baronet) 4名、エスクワイア (Esquire) 25名、陸海軍将校や Hon. の称号を持つものが7名の計71名であり、国王ウィリアム4世もクラブのパトロンであった<sup>38</sup>。1846年においても、上流階級のみで構成されるというジョッキークラブの本質は一切変わらず、総勢78名のうち、公爵6名、侯爵3名、伯爵17名、子爵3名、卿5名、準男爵9名、エスクワイア25名、陸海軍将校や Hon. の称号を持つものが10名で、アンソン大佐、ジョージ・ペンティンク卿、イグリントン伯爵が幹事を務めていた<sup>39</sup>。

前節で、ペンティンク卿時代末期に、*Racing Calendar* における敬称つきの別枠掲載定期購読者の数とその初期と比べて減少したことを述べた。しかし、両時期において、敬称つきで購読者リストの先頭に掲載されているメンバーの割合は、むしろ増加傾向を見せている。表4と5は1836年版と1846年版の*Racing Calendar* 定期購読者リストにおけるジョッキークラブメンバーの敬称別分類を示したものであるが、敬称つきで掲載されているメンバーの割合は、1836年版では71名中37名の約52.1パーセントであったのに対し、1846年版では78名中47名の約60.3パーセントになっている。この事実は、競馬が他の階級にも開放されていく一方で、ジョッキークラブ自体は、その閉鎖性を保ち、時には強化していたことを意味している。

また、1836年4月13日の *The Times* において、ジョッキークラブとロンドンにある複数の有名クラブとの繋がりが明文化されたが、それは、ホワイトズ (White's)、ブルックスズ (Brookes's)、ブードルズ (Boodle's) のメンバーであれば、ジョッキークラブのニュー・ルームズ、コーヒー・ルームに対する半年の会費の支払いだけで、そこへ入場可能という内容であった<sup>40</sup>。ジョッキークラブが、各ルームへの入場に関して、それぞれに厳しい無記名投票を課していたことを考えると、同じ上流階級に属するクラブの人々に彼らの社交空間は制限されることなく、むしろ拡大されるという一面があった<sup>41</sup>。ジョッキークラブは、排他的な規則を設けることで、常に自らと同じ階級に属するメンバーだけをクラブ内に組み入れてきたわけである。

この団体の閉鎖性をさらに際立たせたものが、サラブレッド (Thoroughbred) の創出であった。サラブレッドは、*Racing Calendar* と同じく、ジョッキークラブの発行物であった *General Stud Book* によって規定された。サラブレッドとして認められ

る権利を持ったのは、1793年の第1巻に記録された繁殖牝馬と種牡馬まで祖先をさかのぼることのできる馬だけであった<sup>42</sup>。これに伴い、サラブレッドの血統がより重視されるようになったが、その好例と言えるものが、*Racing Calendar*の巻末に掲載された種牡馬広告である。これは、ある種 *General Stud Book* と連動する働きを持っており、1836年版の *Racing Calendar* では79頭、1846年版では67頭の種牡馬広告が掲載されていた<sup>43</sup>。詳細な情報が盛り込まれた種牡馬広告は、馬主として成功を収めたい支配階級や富裕な中産階級にサラブレッドに対する血統希求を芽生えさせたことであろう。事実、この時期に激増した馬主数を考慮すれば、間違いないと言っていい。また、サラブレッドの血統は後世に連綿と受け継がれてゆくもので、支配階級そのものの血統意識と重なるものがあり、サラブレッド自体は、彼らの高貴さや家柄の正統性などを投影するものでもあった。サラブレッドの所有は、馬主になり始めた中産階級の富裕層にとって、自らの社会的上昇という大きな意味を持っており、競馬を見て楽しむだけであった労働者階級もまたそのスポーツに熱狂したことを鑑みれば、サラブレッドはあらゆる階級を魅了していたといえる。

しかし、社会的地位のない人が優秀なサラブレッドを所有しても、非難の対象となるだけであり、決してジョッキー・クラブのメンバーになることはできなかった。例えば、稀代の名馬エクリプスを所有した詐欺師デニス・オーケリー (Denis O'Kelly) がその好例であった<sup>44</sup>。また、議員であったが、肉屋、プロボクサー、パブの主人という経歴を持つジョン・ガリー (John Gully) も、名馬を所有していたにもかかわらず、ジョッキー・クラブの上流階級のメンバーたちに認められるには、十分でなかった<sup>45</sup>。このように、ジョッキー・クラブは、自らの枠組みには入り得ないと判断した人物を締め出すという徹底的な排除の構造を保ちながら、自らと繋がりがあり、リスベクタブルな地位にある人々へのみ、クラブの扉を開放したのであった。

また、ベンティンク卿時代には、各地でグランド・スタンドが建造されたが、彼とつながりの深かったグッドウッド (Goodwood) では、1842年に完成し、競馬はその地域における一大スポーツ・アトラクションとして認識されていた<sup>46</sup>。この時期になると、競馬場になだれ込んでくる他の階級を締め出すことはもはや不可能であったが、支配階級の人々は、グランド・スタンドの階上席に陣取ることで、身分的な切り分けを行うことができ、なおかつイギリスの一大スポーツである競馬のパトロンとして、巧みな方法で彼らのリスベクタビリティを維持させることに成功したのである。

## おわりに

ここでは、主に上流階級について考察してきたが、同時に中産階級の登場が見られ、



上流階級との社交空間における関連性について確認することができた。まず、*Racing Calendar* の分析から、19世紀中頃において、Mr. の称号しか持たない定期購読者の割合と馬主の割合が増加した点を指摘できる。このことは、有閑階級に属さない人々が積極的に競馬に参加するようになった事実を示しており、競馬のある種の開放性を見て取ることができる。加えて、ジョッキークラブのメンバーが貴族を中心とした上流階級のみで構成されており、設立から長い年月を経たベンティンク卿時代においても、厳しい閉鎖性を維持していた点が明らかになった。また、当時建造されたグランド・スタンドを考慮すると、貴族、ジェントリたちが意図的に他の階級との切り分けを図っていたといえる。

このように、一見すると相反する、上流階級以外の人々への競馬の開放と、ジョッキークラブによる支配階級の社交空間の制限という二つの事実が、当時の競馬の中には混在していた。加えて、*General Stud Book* は、サラブレッドの創出という重要な意味を持ち、種牡馬広告とともに、馬主である貴族、ジェントリと中産階級の富裕層に対して血統への希求を促したが、それぞれに与えた意識は、尊厳の維持と社会的上昇であったといえる。

本論文では、競馬のスポーツ化の開始、競馬を通してのジェントルマン層の尊厳の維持や、ジェントルマン階級への上昇を狙う富裕な中産階級が競馬に参加し始めた過程を、ジョッキークラブの後期発展期、すなわち、ジョージ・ベンティンク卿の活躍した1830年代半ばから1840年代半ばの時代に限定して考察してきたが、他の時期や一般民衆にとっての競馬は考察の対象外であった。また、各地域の定期購読者層をさらに分析することで、それぞれの特色が見えてくるだろう。これらの点に関しては、別稿に機会を譲ることとしたい。

〈註〉

- 1 Wray Vamplew, *The Turf: A Social and Economic History of Horse Racing* (London, 1976), pp.77-109.
- 2 Robert Black, *The Jockey Club and Its Founders: In Three Periods* (London, 1891).
- 3 ジョッキークラブの競馬施行規則 (Rules of Racing Made by the Jockey Club at Newmarket) の全国的な伝播に関しては、1876年の *Racing Calendar (Races Past)* に以下のような記述がある。「先のホートン開催で議論され、例の目的のために設立された委員会によって提出された新しい競馬規則を考慮するために、1876年12月18日の月曜日にロンドンで開かれたジョッキークラブの特別会合で、下記の規則が1877年1月1日に施行されるべきこと、しかも、全ての元の規則がその日から廃止されるということが決議された。」*Racing*

*Calendar (Races Past)*, Vol.104, 1876, p.xxix.

- 4 ジョッキー・クラブの初出は、1751年のジョン・ポンドによる *Sporting Kalendar* に掲載された一文であり、そこには、1752年4月1日の水曜日に、ニューマーケットにおいて、ペル・メル (Pall Mall) にあるスター・アンド・ガーター (Star and Garter) のジョッキー・クラブの貴族、紳士たちが所有する馬によるコントリビューション・フリー・プレート競走が、8ストーン7ポンドの斤量のもと、ラウンド・コースで1ヒート行われると記されている。John Pond, *The Sporting Kalendar: Containing a Distinct Account of what Plates and Matches Have Been Run for in 1751, an Article for Making a Newmarket Match, a Description of a Post and Handy-Cap Match, a Table Shewing what Weight Horses are to Carry for the Give and Take Plates; and of what Matches Have Been Run for at Newmarket, from October the 1st, 1718, to October 1751, & c.* (London, 1751), p.225. ジョッキー・クラブの「ジョッキー」とは、「プロフェッショナルな騎手」ではなく、馬主かつアマチュアの乗り手であったジェントルマンの人々を指している。当時の競馬に参加したジェントルマン層の人々は、自らが所有する馬に自ら騎乗していたため、「馬主兼乗り手」といった意味でこのように呼ばれる。
- 5 例えば、以下の史料には、二人の紳士が、約11時間半をかけてそれぞれの所有馬を競わせたという記録があり、片方の馬が100マイルの距離を走るまでに、もう片方の馬が80マイルを走ることができるか否か、という競走内容であった。 *Gentleman's Magazine*, Vol.20, 1750, p.376.
- 6 Richard Holt, *Sports and the British: A Modern History* (Oxford, 1989). Neil Tranter, *Sport, Economy and Society in Britain, 1750-1914* (Cambridge, 1998). Adrian Harvey, *The Beginnings of a Commercial Sporting Culture in Britain, 1793-1850* (Burlington, 2004).
- 7 Peter Borsay, *A History of Leisure: The British Experience since 1500* (Basingstoke, 2006).
- 8 川島昭夫「19世紀イギリスの都市と「合理的娯楽」」、中村賢二郎編『都市の社会史』ミネルヴァ書房、1983年、294-318頁。
- 9 Robert Black, *op. cit.*, pp.11-12.
- 10 Roger Mortimer, *The Jockey Club* (London, 1958). John Tyrrel, *Running Racing: The Jockey Club Years Since 1750* (London, 1997).
- 11 Mike Huggins, *Flat Racing and British Society, 1790-1914: A Social and Economic History* (London, 2000), Ch.7.
- 12 Derek Birley, *Sport and the Making of Britain* (Manchester, 1993), p.136. 当時の幹事は、サー・チャールズ・バンベリー (Sir Charles Bunbury, 1740-1821) で、発行者は、ジェイムズ・ウェザビー (James Weatherby, 1733-94) という人物であった。
- 13 Mike Huggins, *op. cit.*, p.175.
- 14 個人の手による記録集の最初のもは、1727年に登場したジョン・チェニー (John Cheny) の *An Historical List of All Horse Matches Run, and of All Plates and Prizes Run for in*

Englandであった。

- 15 *Racing Calendar*, Vol.64, 1837. 発行は1837年であるが、その内容は1836年の競走結果等を掲載したものであるため、本論文では、この第64巻を1836年版と記載しておく。*Racing Calendar* は、概ね対象となる年に発行されたが、翌年にずれ込む時もあった。
- 16 *Ibid.*, pp.vii-xxiv. 購読者リストにおける貴族の掲載は、当然のことながら Duke から始まっており、以下 Marquis, Earl, Viscount, Lord と続いている。それぞれ同じ枠の中では、彼らもアルファベット順に掲載されている。
- 17 この姿勢は、1831年11月1日、ニューマーケットにおけるジョッキー・クラブの幹事たちとメンバーたちの会合で決定されたものであり、ペンティンク卿時代を通じて変わることなく保たれていた。
- 18 *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.xxxiii-xxxvi.
- 19 これに関しては、註3を参照のこと。
- 20 *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.vii-xxiv.
- 21 *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.vii-xxiv.
- 22 例えば、1773年の初版における定期購読者数は522名であった。*Racing Calendar*, Vol.1, 1773, pp.i-x.
- 23 *Ibid.*, Vol.1, 1773, pp.i-iii. ここでは、一般的な Sir の人々には明確な敬称はないが、敬称のある人々と同枠で掲載されているため、彼らを同質として扱う。
- 24 *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.vii-xxiv.
- 25 *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.vii-xxiv.
- 26 1846年版では、ヴィクトリア女王が HER MAJESTY の敬称で定期購読者リストの先頭に記載されている。
- 27 *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.vii-xxiv.
- 28 *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.vii-xxiv.
- 29 *Racing Calendar*, Vol.1, 1773, pp.i-x.
- 30 *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.l-liv.
- 31 初版と比較して *Racing Calendar* の購読者が急増した18世紀末の1799年版においても、ニューマーケットにおける馬主の数は44名にすぎず、極めて限定的でしかなかった。*Racing Calendar*, Vol.27, 1800, pp.xxxiv-xxxv.
- 32 *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.lxi-lxviii.
- 33 C. M. Prior, *The History of the Racing Calendar and Stud Book* (London, 1926), pp.192-196.
- 34 Wray Vamplew, *op. cit.*, p.77.
- 35 C. F. Brown, *The Turf Expositor* (London, 1829), p.131. これは、1828年に作成された、新しい Rules and Orders of the Jockey Club の第11項、Respecting the Admission of New Members for the Jockey Club に当たるもので、新メンバーの入会に関する項目は、これが

唯一のものである。これに引き続き第12から13項にはニュー・ルームに関する項目、第14から16項にはコーヒー・ルームに関する項目がある。ジョッキー・クラブメンバーのニュー・ルーム、コーヒー・ルームへの入場は何ら問題なかったが、ジョッキー・クラブメンバー以外の人がニュー・ルーム、コーヒー・ルームへ入場するためには、それぞれ別の無記名投票で当選する必要があった。ニュー・ルームへの入場に関する無記名投票に通過した人は、コーヒー・ルームへも入場できたが、コーヒー・ルームへの入場に関する無記名投票に通過しただけの人は、ニュー・ルームへは入場できなかった。この時期には、ジョッキー・クラブメンバーを頂点として、クラブメンバーでなくニュー・ルームとコーヒー・ルームに入場できる人と、クラブメンバーでなくコーヒー・ルームにのみ入場できる人という3つの層が存在していた。

- 36 Mike Huggins, *op. cit.*, p.177.
- 37 C. M. Prior, *op. cit.*, pp.192-193.
- 38 *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, p.579.
- 39 *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, p.480.
- 40 *The Times*, 13 April 1836. これは、1828年に作成された、新しい Rules and Orders of the Jockey Club の第13項を改定したものである。
- 41 ジョッキー・クラブの各ルームへの入場に関する規則は、註34を参照のこと。
- 42 Federico Tesio, *Breeding the Racehorse* (London, 1958), p.4. *General Stud Book* の創刊もまた、*Racing Calendar* の発行者であるジェイムズ・ウェザビーによる。この2年前の1791年に、彼は *General Stud Book* の序巻を出している。
- 43 *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.562-576. *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.464-477.
- 44 Robert Black, *op. cit.*, p.238. デニス・オーケリーはアイルランド貧農の出であった。
- 45 *Ibid.*, pp.360-361. ジョン・ガリーは、ポンテフラクト (Pontefract) 選出の庶民院議員であった。彼の競馬生活などについては、以下を参照のこと。William Pitt Lennox, *Celebrities I Have Known with Episodes, Political, Social, Sporting, and Theatrical*, Vol.2 (London, 1876), pp.245-251.
- 46 *The Illustrated London News*, Vol.1, No.12, 1843, p.184.

(表1) *Racing Calendar* 定期購読者の層別分類

	1773年版	1836年版	1846年版
敬称あり	95	167	142
Esq.	194	497	449
士官など	21	46	47
Mr.	209	588	561
団体	0	32	54
国外購読者	3	35	55
計	522	1365	1308

出典：*Racing Calendar*, Vol.1, 1773, pp.i-x と *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.vii-xxiv および *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.vii-xxiv より筆者作成

(表2) *Racing Calendar*における敬称つきの別枠掲載定期購読者

	1773年版	1836年版	1846年版
His(Her) Majesty	0	1	1
His Royal Highness	1	0	2
His Grace	12	8	7
The Most Noble	0	9	7
Right Honourable	42	72	60
(The) Honourable	13	31	28
Baronets (Sir)	27	46	37
計	95	167	142

出典：*Racing Calendar*, Vol.1, 1773, pp.i-iii と *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.vii-xi (本来は7から9ページであり、この版では9ページが11ページと表記されたミスがあるが、史料のとおり表記しておく) および *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.vii-ix より筆者作成

(表3) *Racing Calendar*における馬主登録者の推移

	1773年版	1799年版	1836年版	1846年版
Sir 以上の称号を持つ馬主	14	21	56	102
それ以下の馬主 (Mr.)	14	23	115	229
計	28	44	171	331

出典：*Racing Calendar*, Vol.1, 1773, p.xxix と *Racing Calendar*, Vol.27, 1800, pp.xxxiv-xxxv と *Racing Calendar*, Vol.64, 1837, pp.l-liv および *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.lxi-lxviii より筆者作成

(表 4) 1836年版 *Racing Calendar* 定期購読者リストにおけるジョッキー・クラブメンバーの敬称別分類

1836年版	
His Grace	Duke of Beaufort
	Duke of Cleveland
	Duke of Grafton
	Duke of Leeds
	Duke of Portland
	Duke of Richmond
	Duke of Rutland
The Most Noble	Marquis of Conyngham
	Marquis of Exeter
	Marquis of Tavistock
	Marquis of Westminster
Right Honourable	Earl of Albemarle
	Earl of Chesterfield
	Earl of Clarendon
	Earl of Egremont
	Earl of Jersey
	Earl of Lichfield
	Earl of Mulgrave
	Earl of Orford
	Earl of Stradbroke
	Earl of Uxbridge
	Earl of Verulam
	Earl of Wilton
	Lord G. Bentinck
	Lord John Fitzroy
	Lord C. Manners
	Lord W. Powlett
	Lord Southampton
Lord Suffield	
Lord Wharncliffe	
Honourable	Col. Anson
	Hon. G. Byng
	Hon. Capt. H. Rous
Baronets	Sir D. Baird, Bart.
	Sir S. Graham
	Sir John Shelley
	Sir M. Wood



敬称なし	S. Batson, Esq. (CAMBRIDGESHIRE)
	H. Biggs, Esq. (WILTS)
	T. Cosby, Esq. (IRELAND)
	J. Douglas, Esq. (LINCOLNSHIRE)
	R. C. Elwes, Esq. (NORTHAMPTONSHIRE)
	C. C. Greville, Esq. (LONDON and MIDDLESEX)
	Gen. Grosvenor (RUTLANDSHIRE)
	A. Goddard, Esq. (WILTS)
	T. Houldsworth, Esq. (LANCASHIRE)
	J. Hunter, Esq. (CAMBRIDGESHIRE)
	W. Hallett, Esq. (BERKSHIRE)
	W. H. Irby, Esq. (LONDON and MIDDLESEX)
	J. Mills, Esq. (HAMPSHIRE and SOUTHAMPTON)
	G. Payne, Esq. (NORTHAMPTONSHIRE)
	G. Rush, Esq. (NORTHAMPTONSHIRE)
	W. A. Roberts, Esq. (WORCESTERSHIRE)
	W. Scott Stonehewer, Esq. (CAMBRIDGESHIRE)
	T. Thornhill, Esq. (NORFOLK or OXFORDSHIRE)
	J. R. Udney, Esq. (LONDON and MIDDLESEX)
	H. Vansittart, Esq. (YORKSHIRE)
H. S. Waddington, Esq. (SUFFOLK)	
購読者リストになし	Duke of Dorset
	Marquis of Hertford
	Lord Lowther
	Duke of Montrose
	John Payne, Esq.
	Col. Peel
	Hon. E. Petre
	S. Stanley, Esq.
	Col. Syngé
	M. Stanley, Esq.
	J. Spalding, Esq.
	Lord Villiers
計	71名

出典：Racing Calendar, Vol.64, 1837, pp.vii-xxiv, p.579より筆者作成

(表5) 1846年版 *Racing Calendar* 定期購読者リストにおけるジョッキー・クラブメンバーの敬称別分類

1846年版	
His Grace	Duke of Beaufort
	Duke of Bedford
	Duke of Montrose
	Duke of Portland
	Duke of Richmond
	Duke of Rutland
The Most Noble	Marquis of Conyngham
	Marquis of Exeter
	Marquis of Normanby
Right Honourable	Earl of Albemarle
	Earl of Chesterfield
	Earl of Eglinton
	Earl of Glasgow
	Earl Granville
	Earl of Jersey
	Earl of Lichfield
	Earl of Lonsdale
	Earl of March
	Earl of Milltown
	Earl of Orford
	Earl of Rossllyn
	Earl Spencer
	Earl of Stradbroke
	Earl of Strathmore
	Earl of Uxbridge
	Earl of Wilton
	Viscount Maidstone
	Viscount Palmerston
	Viscount Villiers
	Lord G. Bentinck
	Lord C. Manners
	Lord W. Powlett
Lord Southampton	
Lord Stanley	
Honourable	Hon. Col. Anson
	Hon. G. Byng
	Hon. E. M. Ll. Mostyn

Honourable	Hon. Capt. H. Rous Hon. Francis Villiers
Baronets	Sir D. Baird, Bart. Sir R. W. Bulkeley, Bart. Sir J. Gerard, Bart. Sir S. Graham, Bart. Sir J. Hawley, Bart. Sir Gilbert Heathcote, Bart. Sir W. M. Stanley, Bart. Sir W. W. Wynn, Bart.
敬称なし	S. Batson, Esq. (CAMBRIDGESHIRE) H. Biggs, Esq. (WILTS) J. Bowes, Esq. (DURHAM) T. H. Cookes, Esq. (BERKSHIRE) R. C. Elwes, Esq. (NORTHAMPTONSHIRE) R. Etwall, Esq. (HAMPSHIRE and SOUTHAMPTON) T. Gardnor, Esq. (SUSSEX) A. Goddard, Esq. (WILTS) C. C. Greville, Esq. (LONDON and MIDDLESEX) Gen. Grosvenor (RUTLANDSHIRE) Cynric Lloyd, Esq. (WALES) H. Lowther, Esq. (LONDON and MIDDLESEX) J. Mills, Esq. (HAMPSHIRE and SOUTHAMPTON) G. Payne, Esq. (NORTHAMPTONSHIRE) Col. Peel (LONDON and MIDDLESEX) W. A. Roberts, Esq. (WORCESTERSHIRE) G. Rush, Esq. (NORTHAMPTONSHIRE) J. V. Shelley, Esq. (SUSSEX) J. Stanley, Esq. (LONDON and MIDDLESEX) W. Sloane Stanley, Esq. (HAMPSHIRE and SOUTHAMPTON) Col. Syngé (IRELAND) H. Vansittart, Esq. (YORKSHIRE) H. S. Waddington, Esq. (SUFFOLK) R. Watt, Esq. (YORKSHIRE) W. Wigram, Esq.-2sets (HERTFORDSHIRE) Gen. Yates (HAMPSHIRE and SOUTHAMPTON)
購読者リストになし	S. R. Batson, Esq. T. Cosby, Esq.

購読者リストになし	T. Houldsworth, Esq.
	Sir. John Shelley, Bart.
	Hon. A. Villiers
計	78名

出典： *Racing Calendar*, Vol.74, 1846, pp.vii-xxiv, p.480より筆者作成